

なり

同新法

葱を能くあらひて剖きて寸ぐらゐに切て、若布を水にあらひ湯にてもどし、みち(すぢの事)をとり去り指にて摘みて小さくして、まぐろを能き程に切て、以上の三種を醋に漬けおき、よき味噌に砂糖を入れまぜて、すりばちにて能くすり、右の三種を酢よりあげて、酢をきりて、これに入れてあへるなり

(るの部)

るりやき鯛の拵へかた

鯛の切身に、玉子の黄味をねりてやくなり、

或母の日記 (第四回)

無名氏

明治三十三年九月三十日生れの女子生後八九ヶ月間の記事

五月二十日 澤庵漬をあづけて下に落すも拾ひ得るようになれり。眠りたきときは兩手にて目をこ

することを覺えたり。五月二十九日 乳母車を買ひ求め日毎にのせあるく、此頃より膳の上にある飯椀を持ちあげて口に

あてるやうになれり。同じ頃眼少し痛み四五日にしてなほれり。今迄は知らぬ人を見るときは泣く癖ありしが、此頃よりあまり泣かぬやうになれり。

六月五日 母につれられ糸魚川町に行き知るべのもとに二泊してかへれり、町よりかへりひるねに

父のよみをる雑誌をほしがれり、夜古雑誌一冊與へたれば喜びてもてあそぶ。

九日 母と共に上州玉明舎にて寫眞をうつせり。

十二日 他の家にて二歳なる男子と太鼓を弄ひ、

二つの内各々鳴りのよきものを取らんと争へり。

十五日 うしろの方より荷馬車の來るを見付け近

くに及び右より左へ見送れり。

十七日 祖母の許へ寫眞を送る。

今月初旬より食時の傍にあり、膳を引き椀をつか

み飯びつに打ちかゝり寸時も目を放つと出來ず。

二十日 小學生徒習字の彩色畫の壁ばりせしを見

て大に喜べり。

二十三日 より口の中にてルーラーと舌をまわ

す、此頃より起きかへり上手になれり。

廿六日 はじめて葛湯を與へしに一小皿程食し終

り尙ほしがれり。

廿七日 飯びつの傍にあり片手に杓子を持ち片手

にて飯をつかみ食へり。

廿九日 二尺程の縁側より落ち、少し泣きしも別

に怪我なし。子守學校或は説教場の如き人々の集

れる所に連れ行くときは大に喜ぶ。此月の末より

飯をかみてたまゝに與ふればうれしがつて母の

あむをおさふ。

七月二日 母の實家より夏のうぶき一襲送り來

る、同時に縫ひたる赤き猿とぶちの犬とを貰ひた

るも、此等の物は未だ喜ばず此時貰ひたる麥コー

センは喜びて食せり。此頃より御免ぐと云へは

顔を左右にふる事をおぼえたり。

十日 大便を失して冷水にて洗ひやりたるに、翌

日より熱を出し、疝消丸三服を用ひたるも熱去ら

ず、十三日相澤玄伯醫の診察を受け散藥二服を用

ひたれば平服せり。